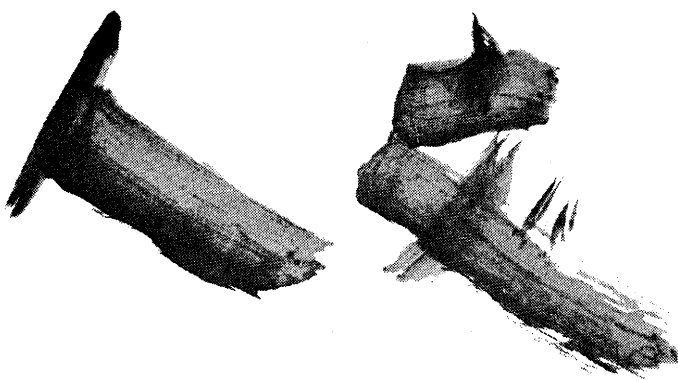




第三七号



1991

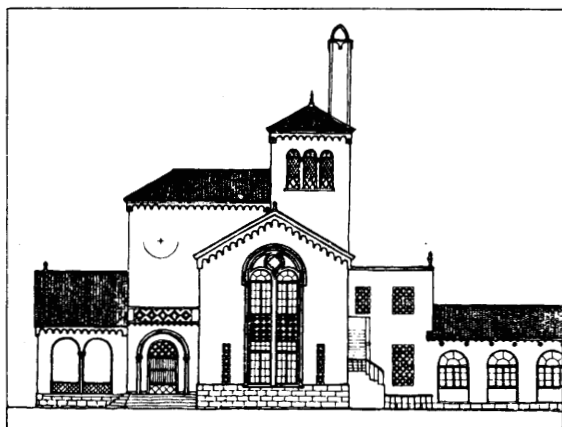
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第三七号

1990年1月—1990年12月

も く じ



随想

美的経験について……………ジャン・マリイ・シェフェール
京都、そして人文研……………全 相運

講演

夏期講座

古文の現代語訳—その源流と原理をめぐって(ハーバー)
／外地と内地—明治憲法と日本植民地(山本)／最近の中国
からの人材流出(新保)／性の刑罰—宮刑(富谷)／知的エ
リートと民主主義(光水)／日本の城とヨーロッパの城(山
下)

開所記念講演

明治地方自治制からみた明治憲法体制(奥村)／ロマン・ロ
マンス・ロマンティック(大浦)／律令と勅令(梅原)

集報

おくりもの(15)・計報(15)・人のうき(15)・外国人研究
員・招へい外国人学者(16)・外国人研修員・外国人研究
生・東洋学文献センター講習会(17)・講演会(18)・お客
さま(19)

共同研究の話題

小説の楽しみ

宿題の完成を目ざして

サンスクリット文献とコンピュータ

旅

一九八九年・「満州国」への旅

貴州トン族の村

サン・メダル教会のコンサート

欧米における中国関係資料

書いたもの一覧

30

24

20

15

11

6 6

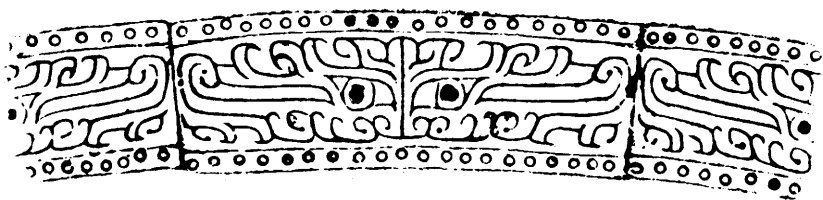
2

美的経験について

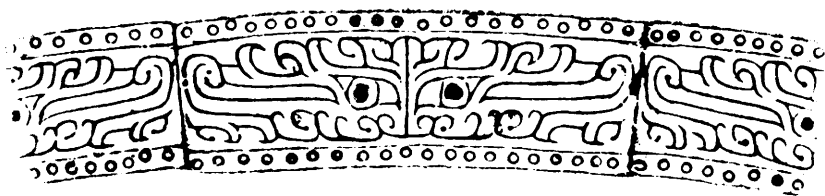
ジャン＝マリイ・シエフェール

芸術を快楽と結びつけることは芸術を卑俗化することだとよく言われる。そこでは芸術の「まっとうな」（認識的、道德的、実存的、社会的、政治的等の）機能や知的豊かさが見失われるというのである。しかし果してそうだろうか。むしろ美的快楽を認めることこそが、社会的コミュニケーションにおける芸術の独自性を正当に評価することにつながるのではないだろうか。ヘーゲルによれば、快楽とは芸術があらゆる歴史的・形而上学的機能を失った後に残るものである。神に見棄てられた寺院は純粹に美的な観賞の対象となる。換言すれば、快楽とは芸術の一機能ではなく、ある作品が美的オブジェとして何らかの機能を果たすための条件なのである。美的経験としての快楽は作品の機能性に抵触するものではない。それは機能性とは全く別の次元にあるからである。

もちろんあらゆる快楽が美的快楽であるわけではない。カントによれば、美的快楽とはあるオブジェ（芸術作品や自然物）に対して行使される我々の表象活動から来る快楽を謂う。人は



一個のリングに対して美的態度を採る限り、それを齧ることはしないだろう。一方、あらゆる表象活動は知的側面を伴う。カントは快楽を無限定的な表象活動によって喚起されるものとしているが、そうではなく、我々の全ての知覚がカテゴリー化されている以上、表象活動は必然的に概念上の規定を受けているはずである。あるオブジェは、美的あるいは芸術的カテゴリーの中で位置づけられて初めて美的オブジェとなる。俳句はまさに俳句として、つまり俳句という文学ジャンルに固有の「期待の地平」の枠内で喜ばれたり疎まれたりするのである。即ちある複雑な知的活動のみが所与の刺激を美的オブジェとして構成することを可能にするのである。ところで美的快楽の本質はまさにこのオブジェ構築にある。従ってそれが知に反するとするのは間違っているばかりではなく、快楽こそが芸術によるコミュニケーションの独自性を保証するのだと言えるはずである。少なくとも芸術との自由な関係（実存的な拘束関係ではなく）というものを基本において考えるならば、そう言えるのではないだろうか。



京都、そして人文研

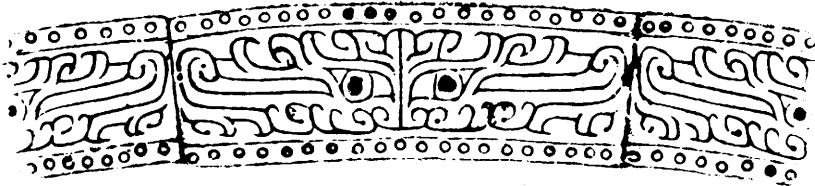
全 相 運

京都に魅せられて二十三年になる。はじめての京との出会いは、一九六八年一月であった。香港での東アジア科学史会議からの帰りである。大阪の伊丹空港から京都までの五十分は、わたしにとって最初の日本体験であった。それは確かに韓国とは違う外国であった。しかしそれには、異質感のない穏やかさが感じられた。

わたしへの京都は、東寺の五重塔からはじまった。空港バスがその前を走ったのである。それは忘れられない印象であった。そして北白川の人文研である。

京都大学人文科学研究所、静かなスペイン風建物の時計計は午後の日影を示していた。それから二週間、わたしは人文研の科学史研究室に熔けこんだ。

火曜日の午後、研究会はわたしを強力にひきつけた。共同研究、文献解説による数内スクールの科学史研究の展開はすぐれたものであった。学問としての東アジア科学史を成立させたエングリンの姿がそこにあったのである。それは強力な学問的伝統であった。科学史家にとって人文研は正に東アジア科学史研究



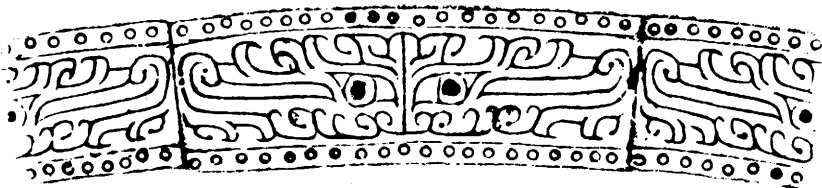
のセンターであり、学問の故郷でもある。それは京都の街と山野に調和し、京都大学の学風と共に高麗青磁のような魅力のあふれる広場である。

わたしにとって京都は、人文研を包容するいいの里である。一九七四年と八三年そして九〇年の、決して短くない歳月を人文研はわたしに藪内スクールの知的蓄積を与え、京都はわたしにいいの森となってくれた。北山の涼しさの中や、東山の紅葉の下を歩きながら、ふと江戸時代に京に來た朝鮮通信使を考へることもあった。友好の歴史をそこに見るからである。その歴史を再現して見たくなる。貴船の千年杉を見ながらわたしは、そう思った。

去年の夏、わたしはイギリスのケンブリッジに行つた。ニードム研究所を訪れたのである。それは西における、もうひとつの東アジア科学史の研究センターである。東、京都、人文研の「共同」研究に対して、そこは西、ケンブリッジ、ニードム研究所の「協同」研究の場である、といえる。そしてその研究成果は、ニードムの『中国の科学と文明』に集約される。それは藪内スクールに負う所が多い。

この春、わたしはニードム研究所での一年間の生活を始める。京都の言語、共同研究と宝ヶ池の思い出を、ケンブリッジの言語と協同研究の中に調和させて見たいのである。

そして来春、ソウルでわたしは、京に魅せられた心の増幅を発見するであらう。



講演



夏期講座（平成二年度）

八月一日～三日
於 本館会議室

古文の現代語訳

——その源流と原理をめぐって——

トーマス・ハーパー

日本の文芸総体のなかでも、とくにすばらしい要素として、翻訳文化の長く多彩な伝統をあげることができ。それは、大陸からの書きことばの導入いらい、十数世紀にわたってゆるがぬ熱意で発展させられてきた。現代日本の大きな書店で、もともと日本語で著わされたものと翻訳ものとは、書棚で数を競っているところを見るのは壯観である。

本講では、その伝統の一端——古い日本語で書かれたものの現代語訳についてとりあげる。というのは、

この分野においてこそ、西洋におけるさまざまな翻訳文化と日本のそれとが、規模と質において大いに異なるからである。日本では、古典とされる作品以外のものも、ずいぶん現代語に訳されている。しかも訳業にたずさわる人々の中に、与謝野、谷崎、川端といった時代を代表する作家たちも含まれるのである。これと比べて、シェークスピアの作品のひとつとして、現代英語訳になったものはない。

このような古文の現代語訳の発展をどう説明すればよいのか、あるいは、その起源をいつに求めるべきか——これらの問いに答えうるには、まだまだ研究不足であるが、起源については、管見のかぎりでは、一八世紀末に注目したい。一七九六年と九七年に『古今和歌集』完訳本が二種刊行されたからである。尾崎雅嘉の『古今集ひなことば』と本居宣長の『古今集遠鏡』である。

数ヶ月をはさんでの二書の出現は、偶然のことか、宣長が疑ったように、雅嘉の「ぬすみ」によるかは謎のままである。しかし両書にはそれぞれ長所が見られ、翻訳文化や翻訳論に興味をもつ研究者には、ともに貴重な資料である。とりわけ、宣長の『遠鏡』の序は、彼の翻訳の諸原則を多くの例とともに述べている。たとえば、なぜ注釈でなく翻訳をめざすのか、もと歌の

語順やてにをはにどのていど拘るのか、時を経て意味不通となったことばをどう訳すか、枕詞や序詞をいかに扱うか、などである。

これらに関する方針を開陳した序文こそ、千首に余る『古今和歌集』の彼による同時代語訳の実例と相俟って、日本語の翻訳技術についての宝庫と呼んでさしつかえない。しかも翻訳論としても、ギリシャやローマの古典、あるいは聖書についての論はヨーロッパでかなり行われているが、日本古典についてのものでは、現時点では唯一の書と思われる。

或る国の文学を外国人として研究する者は、その仕事のあらゆる局面で翻訳という問題に直面し続けている。その意味でも『遠鏡』に教わることは、はかりしれない。宣長翁に深甚の謝意を表したい。

外地と内地

——明治憲法と日本植民地——

山 本 有 造

日本の近代植民地帝国としての出発は、日清戦争の戦利品としての台湾領有にはじまる。台湾領有は、国内的によく定着しつつあった明治憲法体制に新領土をいかに組み込むかという新しい問題を提起した。

台湾を植民地として統治するのか、内地同様に統治するのか。結局のところは、統治上の現実的必要と政府ないし軍部の政党排除の要求の結合の上に「六三法」の制定となった。ここに、本土にたいする法制および政治的「異域」を新たに設定することによって、台湾の日本帝国への統合が図られたのである。

しかし他方において、台湾の（そして日本植民地全般の）地域的隣接性と文化的類似性の理解のうえに、内地延長主義ないし同化主義をもって（日本的）統治イデオロギーとする主張も早くから見られた。こうして、法制的・政治的には明白に異域Ⅱ植民地でありながらイデオロギー的には内地化を標榜するという、現実と理念の（二重性）がつねに日本の植民地問題にはつきまとうことになる。

現実と理念の（二重性）の解消をめざして植民地統治方針としての「同化政策」が明確に打ちだされたのは、一九二〇年代「文化政治」期であり、その主導イデオロギーは原敬であった。日本的同化主義は、一九三〇年代の植民地「皇民化政策」において頂点に達する。日本の同化主義は、その終末直前において、植民地人民に対する徴兵義務と参政権の付与という段階にまで達した。日本植民地帝国は、その成立期に孕んだ現実と理念の（二重性）を、その終末期にいたって「皇民

化政策」という特殊日本的な形で解消するに至った。しかし、そこに成立した「内外地統合」は、すでに命脈のつきた「日本帝国」とその運命を共にした。

最近の中国からの人材流出

新 保 敦 子

中国近代史の中で、留学生は極めて大きな役割を果たしてきた。文化大革命終了後の中華人民共和国においても、政府は現代化路線を推進し、現代化の鍵としての科学技術の現代化実現のために、留学生を西側諸国、特にアメリカに多数派遣するようになった。

こうした留学生の多くは、帰国を望んでいない。留学生が帰国を希望しない背景には、構造的問題が存在しているように思われる。本報告では、頭脳流出の背景にある人材活用システムにおける問題点や、人民共和国政府の対知識人政策等について考察することを課題とする。

一九七九年から一九八七年にかけて五万六千人の中国人留学生がアメリカに出国した。その内、合法的あるいは非合法的に滞在身分を変更しアメリカに居住している者の総計は八千五百人と推計されている。また

日本においても、一九八四年以降中国入就学生（法務省の管轄下にある日本語学校で学ぶ学生）が急増している。ほとんどの者が可能ならば帰国を希望せず、あらゆる手段を使って帰国の延長、ビザの切り替えをはかろうとしている。

それではなぜ多くの中国人は出国しようとし、出国後は帰国を希望しないのだろうか。その要因としては、まず第一に経済的格差の存在がある。第二に近代化路線に伴う価値観の変化が指摘できよう。現在、資本主義的原理の導入によって、現実的利益を重視する価値観が浸透しつつある。第三に、人材活用システムの問題がある。人材活用システムに問題があるため、技術者の技術革新に対する意欲を引き出すことができない。また人材配分のアンバランスもあって、少なからず若手の技術者が余剰人員となっており、不満から留学を希望している。留学後は研究の成果を中国国内で生かすことが困難なため、帰国を希望しない。

最後に第四として、中国における知識人問題の特殊性が、指摘できる。農民・労働者を主体とする共産党政権の下で、知識人は弾圧されてきた。文革終結後、知識人の待遇改善が進められているが、決して十分なものではない。共産党政権は、知識人にインセンティブを与えることにも失敗しているのである。

特にアメリカに向けての大量の頭脳流出は、皮肉なことに発展途上国である中国が、先進国のために人材養成を行うという、パラドックスを生んでいる。

性の刑罰——宮刑

富 谷 至

男性の性器を除去する宮刑という刑罰は、中国では殷周時代から存在し、秦漢へと受け継がれていくが、これは刑罰の原初形態ともいえる反映刑の一種と考えられ、姦淫罪に対して適用される刑罰とされてきた。しかし、その考え方は、漢代訓詁学と近代比較法制史学の二つの流れから導き出された誤解に他ならない。宮刑は反映刑として発生したのではなく、他の身体毀損刑（肉刑）がそうであるように、追放刑の一つとして、しかもヒト（男性）にのみ適用された刑だったのである。生殖能力を有する動物社会からの追放、これが宮刑の性格といつてよからう。以上が話の前半部。話の後半は、宮刑の漢以降の歴史をたどる。隋開皇年間に宮刑は廃止されたと言われているが、その廃止についての宣言は明確に史料のうえに表れてこない。それは何故か。官僚制の整備に相応する官僚希望者の

加熱が、裏の出世コースである自宮宦官の増大を生み、宮刑の刑罰としての効果がなくなつたからであり、廃止の宣言など無意味となつてしまつたからであつた。

知的エリートと民主主義

光 永 雅 明

イギリスの大衆民主主義は、第二次選挙法改正（一八六七）で本格化する。その運動の知的指導者になつたのが、フレデリック・ハリスン（一八三一—一九二三）をはじめとするイギリス実証主義者たちであつた。当時、参政権拡大に対する批判は、非合理的な労働大衆には政治を任せられない、というものであつた。知的合理性を政治参加の要件と見なし、現時点では知的エリートの政治権力を強化しようとしたJ・S・ミルはその代表である。しかし実証主義者たちは、労働者個人の知的合理性を重視はしない。彼らにとって重要なのは、本来有機的に一体である労働大衆（すなわち国民）が、その総体としての「意志」を世論の形で表明することにあつた。参政権を通じて世論を表明すれば、有能な政治家がそれを実行しよう。その世論を指導し、修正するのが、政治制度の外にいる知的エリート

トの役割であつた。こういった議論は、彼ら好みの政治家（グラッドストーン）や、集団主義的だが自由党政治家には従順な労働組合員が存在していた当時は説得力をもち、実証主義者たちも世論指導者として影響力をもつたのである。しかし、実際にその後の議会制民主主義が生み出したのは、ハリスンらには国民の有機的一統を破壊すると映つたもの——すなわち帝国主義と社会主義であつた。同時に、一九世紀末までに、実証主義者たちの知的影響力も無惨に低下してゆく。ここで危機感を深めた彼らは、まず何よりも国民世論を統合するため、イギリス王政がもつ歴史的な魅力を利用し、さらに、貴族院を改革して、そこに開明的貴族や経験の深い政治家、さらに知識人を配し、セクト化する下院に対抗する国民的な上院を形成することを提案する。このような王室・貴族院の利用は、ステーツマン、労働大衆、知的エリートの連合からなる本来の彼らの政治思想からすれば変則であつたが、実証主義が規定していなかった国際的、国内的諸条件のもとで国民統合を最優先した場合の論理的帰結でもあつた。このことは、補足すれば、実証主義者たちによる日本の近代化論からも伺えよう。

日本の城とヨーロッパの城

山下 正男

日本史上三つの大きな土建ブームを数えることができる。第一は四世紀から七世紀にかけての古墳築造ブームであり、第二は一四世紀から一六世紀にかけての城郭建造ブームであり、第三は二〇世紀後半における高層ビル建造ブームである。本講演は第二の土建ブームを扱うものである。

日本の城郭は江戸城、大坂城、姫路城などのような最末期のものについては昔から研究が盛んであつたが、鎌倉、室町期における小規模の初期城郭の研究はまだ進んでいない。これはヨーロッパにおいても同様であつて、英独仏における一〇世紀から一二世紀にかけての初期城郭の発掘はまだ少ししかおこなわれていない。以上のような現状にかんがみ、日本においても特に宅地造成がおこなわれるまえに、初期城郭の所在調査と発掘調査をおこなわなければ、日本封建制の研究のうえでとりかえしのつかないことになる恐れが多分にあるといわねばならない。

とはいえこれまでの初期城郭の研究の結果、一村に

一城といっているくらいに驚くべき密度で初期城郭が存在していたことがわかってきた。そしてこうした小規模城郭には地侍、在地土豪がいわゆる一所懸命という気がまえて立てこもり、兵農非分離のままで自己の所領を経営し、防衛していたのである。

このような日本封建制の実態は、西ヨーロッパの古典的封建制と双璧をなす世界史上の一大偉観といえるが、こうした互いに独立した二つの地域が日本側にいくらかの遅れはあるものの、ともによく似た近代社会への歩みを踏みだしたという事実は、人類史の普遍的な発展を研究するうえでまことに貴重な研究対象といわなければならない。

ところで日本におけるそうした大量の小型城郭の発生は、古代的な王地王民制から近代的な土地の細分的私有制（戦後農地解放）へと向かった日本の長い歴史的過程のうちの重大な中間段階を構成するものといえる。そしてこれは *An Englishman's house is his castle*（英国人の家は城である）といった西欧的状况と軌を一にする。つまり、近代の原理である個人的所有制の前進にとって、小城というものがきわめて大きな役割を果たしたということを日本と西欧の双方において確認できるのである。

このような所有権の細分化は、当然、所有者層の

増大と沈降をひきおこし、重心の低い安定したデモクラシイ的国家形態を生みだす端緒を提供したのである。

開所記念講演（平成二年度）

十一月八日
於 本館会議室

明治地方自治制からみた

明治憲法体制

奥村 弘

明治地方自治制度の基本的法令である市制町村制は、名誉職制・公民権・不要公課町村・公民権というそれまでの地方制度にない自治体運営理念の上に形成された。ところがこれらの運営理念は現実の制度運営において機能せず、理念と実態は乖離する。

旧来の研究は、この理由を地方自治制の外來性にもとめ、町村合併など実際の改革に主眼が置かれた。しかしこの乖離は、法案を作成した官僚自身も把握していた。問題はなぜ乖離を予想しながら、それを導入したかという点にある。

それは、明治憲法体制の社会編成全体から考える必要がある。旧来の政治史では、憲法は伊藤、地方自治

制は山県により、理念的に対抗関係を持ちながら作られたとする説が有力である。しかしそれは実証的に誤りであり、両者は密接な関係を持つ。

政治思想史の分野では、両者は関連づけられており、藤田省三氏は、前近代的な「家」に基づく調和原理が、地方自治制により国家秩序化し、教育勅語によってその普遍性が確保されると述べている。しかしここでは国家秩序化の過程は具体的に語られていない。それは、①近世には存在しない地方自治制の基本理念を問題にできないこと、②国家による社会秩序の強行的設定という把握が十分でないこと、に起因している。

社会秩序が強行的に設定されたのは、国制上、天皇を権力の源泉として社会編成が行われたことによる。

明治地方自治制において自治は第一義的に国家への義務であり、この義務の代償としての権力の付与という形をとる。これは教育・勸業・衛生など受益と負担が同一対象上に存在する現実の自治体運営と異なる理念であり、なおその間には乖離があるが、天皇を権力の源泉とする以上、この理念でしか住民への権力付与は不可能であった。

しかもこの制度は、人民の国家への義務遂行という質的「平等性」の上に、義務遂行量（国税・町村税負担額の大小）という量的差異に基づいて、政治的権利

の量的差異が設定されていた。これは政治的平等主義を唱える左派自由主義・社会主義への対応を意味していた。この設定のされ方は、身分的諸特権が短期に廃止され、その上に財産秩序が形成されつつある日本の政治状況に適合するものであり、地域社会において、緊張関係を持ちながらも受容されていた。

ロマン・ロマンズ・ ロマンティック

大浦 康介

フランス・ロマン主義（そしてできればロマン主義一般）を「公式」のロマン主義期（一八二〇—四三年）以前に戻って、またそこでの「ロマンティック」という語の意味の再検討を通じて考える、というのが本講演の主旨である。

『ルネ』（一八〇二年）と『オーベルマン』（一八〇四年）はともに自然を重要なテーマとする作品であるが、そこでの自然は主人公にとって自己投影（溶解）の場であると同時に想像力を誘起する特権的空間である。この想像力は詩的想像力であり、しかもその発現はオシアンなど過去の詩人たちの口吻を真似るが如くに彼らと共に歌うことに他ならない。想像力が自然を

契機とし、また必ずと言ってよい程ある文学的レフェランスを伴うというこの事実をどう解釈すべきなのだろうか。ここで問題とされる自然は、社会からの隔絶感および変化やコントラストを特徴とする自然、「ロマンティック」と呼ばれる自然である。この自然は実は「無垢」の自然なのではなく、本質的に既に語られた（歌われた）自然なのではないだろうか。ここで想像行為とはまさに一種の引用なのではないか。自然が「ロマンティックである」というのは、「（例えば）オシアンの世界を想起させる」ということと同義なのではないか。自然のこの文学性こそが、決して自明とは思われない自然と想像力の結びつきをいわば内側から保証しているのではないか。

こうした見方は実は「ロマンティック」という語の起源と用法に呼応している。仏語の *romantique* は一八世紀に英語の *romantic* の訳語として使われ始めた語だが、後者は「ロマンス」（更に古くは古仏語の「ロマン」）から派生した語で、もともと主に中世騎士道物語を参照対象として「伝奇的な、不可思議な、牧歌的な」といった意味に用いられ、早くから特に風景を形容するのに使われた語である。時代とともに参照される文学もそのニュアンスも多様化するが、過去の文学へのレフェランスという基本構造は変わらない。

つまり、単純化を恐れずに言うならば、「ロマンティック」という語はその大元においてあるもの（例えば自然）がある文学に関係づけるための言葉なのである。この語のこうした性格が、いわゆるロマン主義の大枠を規定する一要因なのだとは言えないだろうか。

律令と勅令

梅 原 郁

旧中国王朝の法典体系は、七―八世紀に、すでに世界に冠たる水準に達していたといわれる。それを直接移入した我国では、中心法典の名をとった、律令制や律令国家という用語が定着している。だが、中国ではそうした用語は必ずしも一般には使われない。明治以後、我国の法制史研究者たちは、日本の律令制を強く意識して、中国の法制を研究してきはしなかったか。いま少し、中国の中に入って、その法制を理解すべきでないかと私は思う。

大雑把に言うと、秦漢帝国の法典は、刑法を中心とした「律」と、具体的刑罰を伴わぬ、命令・禁止的な「令」に大別され、それに、詔勅の形で随時發布される諸法が、集成附加される。三国の魏から次の晋代、

律と令の区分は次第に明確となり、さらに南北朝期の曲折ののち、隋唐時代の整然たる姿に生長する。こうして、唐の法典体系は、律（12篇五百条）、令（30卷千五百余条）を軸に、逐次追加される補足法令の格、施行細則の式から成り立つ。八世紀なかばに、高い水準に達し、日本もそれを受容したこれら法典類は、中国では、その時点で内部に大きな変質を生じていた。社会の発展と、それに対応する国家行政の複雑・多様化が従来の体系と溝を生じ、相い伴わなくなつてゆく。

世に唐宋の変革と呼ばれる二百年の激動期をへて、一〇世紀なかばすぎ成立した宋王朝では、法典体系の中味が著しく変化する。「律」は基本刑法典としての權威を保持しつつ、一步奥に退き、多様な現実に、柔軟に対応できる「勅」が前面に出て、律の代行を行う。従つてこれまでの「格」は不要となり、名称だけ残して、式とともに施行細則の役割を分担する。こうして、律令格式は勅令格式の体系となる。その改正編纂は十数年ごとに行われるが、法典体系としての不安定性は続く。他方、宋と同時並行的に、遼・金・元と代る異民族王朝では、一旦、唐の律令に出発点を戻し、自己の民族の特性を加味した法典体系を展開させる。この時、宋の進んだ法典も何らかの形で強く影響を及ぼしている。

北方の異民族王朝と、南方の漢民族王朝の法典内容を、まとめあげ、同時に、長い中国の法典変遷の歴史の到達点となつたのが、明清時代である。ここでは「律」と「会典」の二本の柱で、刑法と行政を区分し、それぞれに「条例」（断例）と「事例」（則例）を加える。そして、両者ともに、行政府「六部」の区分により、項目を立てているところに、刑法、行政法といつても、旧中国の国家法典と行政との深いつながりが窺われる。



彙報 (一九九〇年一月より一九九〇年二月まで)

おくりもの

。林屋辰三郎名誉教授は、日本史および日本芸能文化史の研究における業績によって、一九八九年度朝日賞を受賞(一月二九日)。

。山田慶児教授は、国際伝統アジア医学研究学会から第一回A. L. Basham Medalを授与さる(一月四日)。

。宇佐美 斉助教授は、『落日論』(筑摩書房)により、第二回和辻哲郎文化賞を受賞(三月一日)。

。日比野丈夫名誉教授は、勲三等旭日中綬章を受賞(二月三日付)。

訃報

。長廣敏雄名誉教授(八四才)は、一月二八日逝去。従四位がおくられた。

人のうごき

。村田裕子助手(東方形)は、辞任(三月三十一日付)の上、山梨県立女子短期大学国際教養科助教授に転出。

。佐原康夫助手(東方形)は、滋賀大学教育学部講師に昇任(四月一日付)。

。甚野尚志助手(西洋部)は、東京大学教養学部助教授に昇任(四月一日付)。

。相川佳子奈良女子大学家政学部教授は、併任教授(東方形)。(比較文化部門、四月一日〜一九九一年三月三十一日)。

。谷山正道広島大学助教授は、併任助教授(日本部)。(比較文化部門、四月一日〜一九九一年三月三十一日)。

。富谷 至助教授(東方形)は、大阪大学教養部講師より昇任(四月一日付)。

。石川禎浩氏を助手(東方形)に採用(四月一日付)。

。佐々木博光氏を助手(西洋部)に採用(五月一六日付)。

。中砂明德氏を助手(東方形)に採用(二月一日付)。

。桑山正進教授(東方形)は、三月八日伊丹発、インドにおいて、仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究を行い、三月一七日帰国。

。前川和也教授(西洋部)は、七月一六日伊丹発、大英博物館においてシュメール楔形文書の研究及びライデン大学において、同出版打合せを行い、八月二〇日帰国。

。田中雅一助教授(西洋部)は、文部省科学研究費補助金により、七月一七日、伊丹発、インド・デリー、マドラス市内において上座部仏教圏における宗教と社会についての研究調査を終え、八月二五日帰国。

。田中 淡助教授(東方形)は、八月一日成田発、ケンブリッジ、ニードム研究所において開催の第六回中国科学史国際会議に出席、併せて大英博物館において研究資料蒐集を行い、八月一日帰国。

。狭間直樹教授(東方形)は、八月一日伊丹発、中国で開催された「孫文とアジア」国際学術討論会等に出席、併せて香

港、マカオ等において研究資料蒐集を行
つて、九月三日帰国。

。森 時彦助教授（東方部）は、八月八日
伊丹発、香港において開催の「近百年来
之中日関係」国際学術研討会に参加して、
八月一四日帰国。

。梅原 郁教授（東方部）は、八月二七日
伊丹発、上海博物館、雲南省博物館、敦
煌博物館等において、唐宋文化社会の研
究に関する資料蒐集を終え、九月一〇日
帰国。

。船山 徹助手（東方部）は、一〇月一日
伊丹発、ウィーン大学において、ジュニ
ヤナシュリーミトラの研究（インド仏
教知識論の研究）を行い、一九九一年七
月三十一日帰国予定。

。曾布川寛助教授、河野道房助手（東方
部）は、一〇月三日伊丹発、中国におい
て開催の敦煌国際学術討論会に出席し、
中国美術資料蒐集を終え、一〇月二八日
帰国。

。田中 淡助教授（東方部）は、一〇月七
日伊丹発、中国において、貴州トン族の
高床住居と集落構造に関する調査と研究
を行い、一〇月二七日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、一二月八
日伊丹発、インド・デリー大学、マドラ
ス大学において、インド寺院文化に関す
る研究資料蒐集を行い、一九九一年一月
一日帰国予定。

外国人研究員

。Thomas James Harper

国立ライデン大学日本学センター講師
一七・一八世紀公家の知的活動の解明
（日本学客員部門）

受入教官 横山助教授

期間 四月一〇日

一八九一年一月三十一日

。Jean-Marie Schetter フランス国立科
学研究センター研究員

文学理論及びヨーロッパの言語と芸術
（比較社会客員部門）

受入教官 大浦助教授

期間 九月一〇日

一九九一年五月九日

招へい外国人学者

。全 相運 誠信女子大学校特別教授

古代韓日技術交流史ならびに近代西欧
科学受容史をめぐる韓日比較

受入教官 横山助教授

期間 三月二日

一九九一年二月二八日

。顔 娟英 台湾中央研究院歴史語言研究
所副研究員

唐代仏教美術の研究ならびに共同研究

「中世の文物」に参加

受入教官 曾布川助教授

期間 九月八日

一九九一年六月三〇日

。鄭 海麟 深圳大学副教授

日中現代化問題の比較ならびに「一九
二〇年代の中国」研究班に参加

受入教官 狭間教授

期間 八月二〇日～十二月二八日

。Ehrey Patricia Buckley イリノイ
大学教授

唐・宋の変革についての研究

受入教官 梅原教授

期間 一二月一日～

一九九二年三月三十一日

馬 璋 復旦大学博士課程学生

日英文化比較

指導教官 山室助教

外国人研修員

期間 一〇月一日～

一九九一年九月三〇日

。Mesnil Evelynne

八～一〇世紀の成都に於ける歴史・宗教・美術の研究

受入教官 荒井教授

期間 四月一日～

一九九一年三月三十一日

。賀 躍夫 中山大学歴史系博士研究生

清末民初中国の社会思潮変遷と日本

受入教官 狭間教授

期間 一〇月二二日～

一九九一年三月三十一日

外国人研究生

。Guarino Marie フロンティア大学博士課程学生

宋代の経筵について

指導教官 礪波教授

期間 一〇月一日～

一九九一年九月三〇日

東洋学文献センター講習会

。一九九〇年度漢籍担当職員講習会(漢籍電算処理)

第一日(一〇月一日)

人文科学とデータベース(講演)

大型計算機センター教授 星野 聡

東洋学文献類目の編纂とフォーマット

(講義) 都築澄子

東洋学文献類目の計算機処理(講義)

大型計算機センター技官 河野 典

東洋学文献類目と漢籍目録の電算化

(講義) 勝村哲也

第二日(一〇月二日)

漢籍入力に便利な三角編号法(講義)

勝村哲也

大型計算機センター見学

計算機処理入門(講義)

大型計算機センター技官 隅元栄子

データベースについて(講義)

大型計算機センター助手 川原 稔

データベース検索(一)(実習)

第三日(一〇月三日)

知識情報処理(講義)

大型計算機センター助手 石橋勇人

マルチメディアと言語処理(講義)

大型計算機センター助教授 久保正敏

データベースと検索(二)(実習)

第四日(一〇月四日)

UNIXと情報検索(講義)

大型計算機センター助手 安岡孝一

漢字コードの話(講義)

大型計算機センター技官 小沢義明

データベース検索(三)(実習)

第五日(一〇月五日)

大学間ネットワークサービス(講義)

大型計算機センター技官 桜井恒正

情報ネットワーク(講義)

大型計算機センター助教授 金沢正憲

。一九九〇年度漢籍担当職員講習会(中級)

第一日(二月二六日)

漢籍一般(講義)

史部書(講義・実習) 梅原 郁

礪波 護

第二日（二月二七日）

經部書（講義・実習）

小南二郎

子部書（敦煌）（講義・実習）

テキサス大学オースチン校アジア研究
所長 R. W. Lattiere

。二月二日 於分館会議室

南京政權の經濟建設

南開大学教授 魏宏運

第三日（二月二八日）

集部書（講義・実習）

荒井健

図書館見学

。二月一七日 於西館会議室

中国東北地区經濟史研究の現状と課題

第四日（二月二九日）

叢書（講義・実習）

勝村哲也

藏書家 滋賀大助教授

井波陵一

第五日（二月三〇日）

朝鮮本（講義・実習）

富山大教授 藤本幸夫

第六日（二月一日）

実習

講演会

。五月二一日 於本館大会議室

功利主義

モナッシュ大学哲学学科教授

Peter Singer

。一〇月一九日 於本館四〇一号室

権力と權威—サンスクリット資料から

みたインド王権



お客さま

二月 五日 中国社会科学院外事局長 張 文閣

三月 二日 中国社会科学院日本文化研究者訪日団 駱為龍他九名

中国社会科学院日本研究所長

三月 七日 北京日本学研究中心日本語研修生一行

團長 李東翔他三二名

三月 一三日 中国中日関係史研究会副秘書長 楊正光他五名

五月 二日 フランス科学研究所 (CNRS)

社会人文科学局長 Jacques Lautman

七月 一三日 中国社会科学院法学研究所

法律史研究室副主任 楊一凡他二名

九月 四日 中国社会科学院歴史研究所副所長 李 祖德

研究員 張 沢咸

副研究員 杜 瑜

副研究員 宋 鎮豪

大韓民国忠南大学校文科大学助教授 李 康承

中国社会科学院世界歴史研究所 徐 建新

九月 一〇日 中国社会科学院語言研究所副研究員 林 聯合

同 右 張 振興

九月 一七日 ダッカ大学社会学部長

一〇月 二日 中国社会科学院近代史研究所研究員 楊 天石

Anwarullah Chawdhury

一月 二日 フランス学院 (Collège de France) 教授

Jaques Gernet

一月 九日 中山大学教授

一月 二六日 中山大学中文系教授

二月 三日 北京大学中古史研究中心副教授

陳 勝壽
李 新魁
榮 新江

小説の楽しみ

—— 研究班・文学から

何が見えてくるか——

飛鳥井 雅 道

「文学から何が見えてくるか」という研究班のタイトルは、古めかしいだけでなく、もしかすると若干ふざけたものに見えるかもしれない、と覚悟していた。しかし、わたしとしては、正味のところなのだ。文学「から」、にミソがあるようにしたかった。

というのも、一九六〇年代に桑原武夫先生が主宰された「文学理論の研究」は、文学に「なにを」求め得るか、その理論如何、といった研究会だったと思う。したがって、巻頭論文には、社会学の作田啓一氏と哲学の橋本峰雄氏の協力を得たとして、桑原・作田・橋本三氏連名の論文が掲載された。しかしこの「理論」は、戦後はリチャーズ、デューイによって考えようとしておられた桑原先生にとって、最大限、社会学、哲学に譲歩した、もしかすると不本意なものだったのかもしれないと今思い始めている。本来の桑原武夫氏は、ヴァレリーやアランの所から出発していて、実感信仰がかなり強かったはずなのに、戦後啓蒙主義の旗手と

しての無理が強かったのではないか。先生が健在なら、すぐに議論をぶつけるところなのだが。

こちらが、突然、功利主義を放棄して、文学に何を求めるかではなく、何が見えてくるかにこだわりたい。なったのは、わたしの病気があったことを否定できない。

ブルースト、トルストイ、ドストエフスキー、ユーゴなどを、そしてなによりも日本近代小説を、わたしは病室で朝五時ごろから消灯時まで読みつけ、とりわけ「アンナ・カレーニナ」の喜びみたいなものに心底から感動した。アンナの心のおのき、これはロシア語で読みたかった。日本語ではいまひとつ解らない。かつてロシア語を投げ出してしまったことが無念でならない。

そこへ先日研究会で、教養部の木村崇さんから、チエーホフの『犬をつれた奥さん』の分析を聞かせてもらった。木村さんの報告は、近く活字になるから、読んで頂きたいが、「奥さん」が決して美人でないこと、彼女が恋におちるまで性の悦びには無縁だったこと、等々を、微にいり細にわたり、いやはや驚いたことには、はじめてのベッドに何時間かけたかにまで、これまでの誤訳、解釈の不備を含めて読取りの結果を解説してもらえた。

理論によってではなく、いや、木村さんは木村さんの理論があつてのうえなのだが、小説を読む楽しさを久しぶりに思い出した気がした。読む楽しみを今後の研究会でも大切にしてゆきたい。

宿題の完成を目ざして

——漢代出土文字資料の研究班——

永田英正

当時、東方部主任だった林已奈夫さんから声をかけられ、幸いにも認められて一九八八年四月から主として漢代の石刻資料を材料に開始した客員部門の班研究も、この三月で終わりを迎えようとしている。

周知のように、本研究所には内藤湖南、桑原隲蔵両博士旧蔵の拓本も含めて膨大な数の中国石刻資料があり、それは質量ともに日本でも有数のコレクションとして定評がある。私がこの資料に直接ふれるようになったのは、一九六八年から七〇年にかけて日比野丈夫先生主宰の「中国金石資料の研究」班に参加して以後のことである。このときまで石刻を史料として利用する場合、専ら活字になった釈文からであり、拓本も書道関係の書物に掲載された部分的なものであつて、全拓を見ることは稀であつた。それだけに次々に手に

する全拓の、実物に迫る力強さに目を見張るとともに、これを何とかして簡便に利用する方法はないものかと考えたのである。そのヒントになったのが、当時完成したばかりの簡牘の写真と釈文を並列した写真カードであつた。そこで日比野先生の許しを得て漢代の拓本写真を複写させてもらい、注釈づくりにかかったのであるが、間もなく転出に伴つて京都を離れると雑務にかまけて仕事は中断同然になってしまった。ただこの計画については最初に林さんに相談したことがあり、そのために林さんからは何時出来上がるのかとよく尋ねられ、揚句のはてにはオレが生きているうちに利用出来るようにしてくれと皮肉られて恐縮することしばしばであつた。林さんからの客員部門の話は、このままでは何時までたつても完成しそうにないので、強制的にやらせようという親心であつたと感謝している。

研究班の発足に先立ち、協力してもらう人たちに趣旨を説明して参加を呼びかけたところ、希望していた全員の快諾が得られ、そのうえ期限内の仕事のために皆さんには無理をお願いしたにもかかわらず熱心に協力していただいたことは、有難かつた。また期間中の一九八九年には、北京図書館蔵の『中国歴代石刻拓本匯編』戦国・秦漢の部が出版されたことは、本研究を進めていく上で大いに役立った。

われわれが今完成を目ざしている仮称『漢代石刻資料集成』上下二冊は、新発見の資料も含めて確かな著録に見える漢代石刻の拓本を網羅することにし、上冊は拓本と釈文を並列した図録集、下冊は釈文の訓読と注、そして解説に当てることにしている。収録する石刻はタイトルの数で約一八〇、その中には初めて釈読した石刻があり、また全文の訓読は大部分が本邦初のものである。いずれにせよ本書の刊行は、学界に裨益するところ大であると信じている。石刻を読んでいく過程で、漢代の政治、経済、社会、文化等にわたって論議が交わされ、その一部は注の中に収められているが、それらの詳細は他日を期し、まずは宿願の石刻資料集成の刊行を目ざしたい。

サンスクリット文獻と

コンピュータ

——伝統の構造研究班——

井 狩 彌 介

古代インドの伝統文化の中核を形づくっているヒンドゥー教世界が広大なインド亜大陸の各地域でどのようなかたちで編成され、確立していったかという問いには様々な仮説が立てられてきているが、まだ解明さ

れていない問題が数多く残されている。この問いを困難にしている問題のひとつは、資料となる文獻の性格そのものにある。我々が扱わねばならない膨大な古代インドのサンスクリット文獻のほとんどは、いわゆる作者不詳の文獻ジャンルに属していて、何世紀にも亘る長期間のあいだに地域的にも広く分布しながら編纂が重ねられ、次第に膨張して発展しながら形を整えていったテキストであるという特徴をもっている。このような文獻を扱う場合には関連文獻の対応部分を集めて比較対照しながら相互影響の問題を検討するいつぱう、各個文獻の内部の重層性を考慮に入れながら慎重に作業を進める必要がある。膨大な文獻量を扱うこのような作業は面倒でかつ気の重いものであるが、コンピュータの利用によって複雑な手作業を要する仕事はかなりの程度能率化をはかることができる。

この研究班では研究の対象とするサンスクリット文獻をコンピュータ入力して班員が随時利用できるファイルを作っているが、このためにはサンスクリット入力方式の標準統一の作成が必要となる。この問題の検討中に当時研究班のメンバーだったヴィッツェル教授（ハーヴァード大）の提案を容れて、班員内部だけではなく国際的な情報交換のネットワークを視野に入れて作業を進めることになった。その結果として作成さ

れたのが「京都——ハーヴァード方式」と名付けられた入力方式である。この方式は、一九九〇年夏にウイーンで開催された第八回国際サンスクリット学会で報告された。そして同学会でのパネル討議を経てサンスクリットをコンピュータ・データに変換する国際統一方式が作成され、世界のサンスクリット文献研究者に向けて提言されることとなった。これをきっかけとして、各国のサンスクリット研究者の間の国際的な情報交換のネットワークが飛躍的に進むことが期待される。

その他に、昨年度の研究会で紹介されて話題となった新しい研究用プログラムのなかでは、中谷英明氏が国立民族学博物館のスタッフと共同で開発したサンスクリット・テキストの韻律分析プログラムがある。これはサンスクリット文献のなかで大きな比重を占める韻文テキストの文体分析に極めて強力な道具を提供してくれるもので、のちに国際サンスクリット学会でも報告された。また矢野道雄氏はこれまで研究者の頭痛のタネであった各種のインド暦と西暦との暦日（と曜日）の対応の問題を解決する見事な変換プログラムを提示した。インドの暦法は、その仕組みがきわめて複雑であり、時代や地方による差異がきわめて大きい。矢野氏は、もともとポピュラーな古典天文学書に基づ

いてインド暦を再現するプログラムを作成し、さまざまなインド暦と西暦との対応をコンピュータ上で迅速に得るプログラムを開発した。同氏は、この結果を、歴史資料と照合させながら、さらに正確なプログラムへと補正しつつある。このプログラムはインド史の資料である碑文や写本コフォンの年代を瞬時に確定してくれる強力な武器を我々に与えてくれることになるだろう。サンスクリット研究者にとってコンピュータはどうやら欠かせない道具となりつつあるようだ。

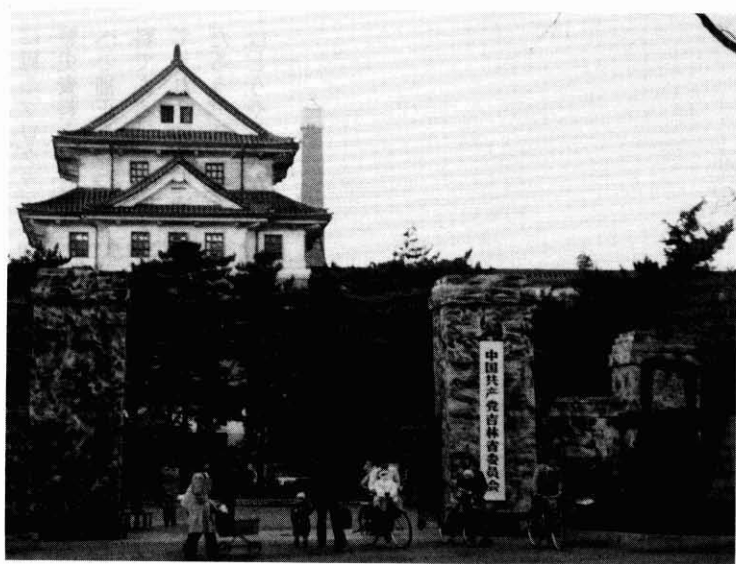
旅

一九八九年・「満州国」への旅

山 室 信 一

外国の歴史や文物を研究対象とする人にとっては、文献史料や小説などで知悉した土地を訪れ、自らがまだ見ぬうちに作り上げたイメージと実際の異同を確かめて心躍らせるという体験はけっして珍らしいものではないであらう。あるいはその落差への予感こそが、それ自体はさわめて単調な文字や図版を追うだけの日常の営みを支え、人をして旅へといざなう原動力となっているのかもしれない。

日本を研究する場合でも類似の体験が皆無というわけでは、もちろんない。しかし、やはりそれはどこか地続きで既知のものの延長として決定的な断絶のないままに現われる。そして、外国とはいえば、そもそも日常的作業とは無縁なだけにそこへの旅は全く未知なものとの遭遇をもたらしてはくれはするが、帰国後は日々記憶の薄



旧関東軍司令部

れるに任せることとなる。

そうした旅を繰り返した身に、既に史料や地図で見慣れた外国の土地への旅立ちの機会が訪れた。それは、ただ空間の旅というにとどまらず、半世紀も以前に存在した「満州国」へのタイム・トリップでもあった。むろん「満州国」は虚構の国家、偽国として現在の中国ではみなされている。だが、国家としての正統性はどうかであれ、また国家とともに奉天や新京という地名が消滅したとはいえ、紛れもなく写真で見たものほとんど違わない外観を呈している建物が次々と現前してきたことも事実である。皇宮、國務院、最高法院、関東軍司令部、満鉄ビル、大和ホテル、満映……。ここで薄儀が政務を執り、この門を石原や東條ら関東軍参謀たちが通り、あのバルコニーに甘粕が毎朝立ったのか——次から次へと眼前の建物に過去の事蹟が二重写しとなって現われ、過去と現実が交錯する。

しかし、延辺（旧間島地方）へさらに大連へと旅を続けるにつれ、こうした過去を現在の中に確認することに苛立しさを覚えてきた。なるほど「満州国」の面影は今も歴然とここかしこに残っている。しかし、人々は「満州国」を峻拒した中国の、しかも一九八九年の苛烈な現実の中に当然のこととして生きていた。「坦白自首招待処」、その白い文字が大連の街頭の赤い夕陽の中で私の

目を射、「満州国」への時間の旅は終わりを告げた。天安門事件から六ヶ月、アカシアの枯葉を吹き飛ばしていく突風は体の芯まで凍えさせるようだった。

風、襟に満つ——東欧連鎖革命の報に接したのは、その旅から北京での勤務に戻った直後のことである。

貴州トン族の村

田 中 淡

昨年一〇月、わたしは同行の奈良国立文化財研究所、国立民族学博物館のメンバー、貴州省民族研究所などの中国側スタッフたちとともに、貴州省黔东南苗族侗族自治州從江県下江区の旅社を出て、都緑江を小舟で渡り、対岸の蘇洞（スウドン）というトン族の村寨に向った。住居が全部で三三棟、世帯数四二、人口二三〇人というごく小さな村落である。わたしたちの調査団は一昨年春、この州のいくつかの代表的なトン族の集落の住居、鼓楼、風雨橋、高倉などについて総合的な調査をおこなったので、今回はある特定の村寨をえらんで全民家の悉皆調査をすすめるのが主眼である。いうまでもなく非開放地区で、外国人が来るのも学術調査もちろんはじめて。事前に貴州



ゲ・プイ（囲炉裏間）で弦奏するS村長

省の土木部門に委託しておいた全体測量もすでに完了していたが、いざ他処者が村にはいるためには、たいへんな儀礼を通過しなければならなかった。小村で、いわゆる寨門に相当する建物はないけれども、石段を積んだ村への入り口の途中に草でいろなかたちに編んだ表象を結びつけたひもを張り、村への進入を阻止する意志がしめしてある。そこで入寨の儀式として歌垣がはじまった。トン族の若い娘たちがトン語で歌を唱う。あとで尋ねたら、要は客人をもてなす用意はないから帰ってくれという拒絶の歌であった。つづいて今度はこちらが歌を唱う番となる。わが方には幸い民博のE氏という強力なメンバーがいるので、代表して唱ってもらうことになって、かれが「向う横町のたばこ屋の　かわいい看板娘……」とつづいてもう一曲を朗々と披露してくれたところ、これが村民の大喝采を博して、一挙に結界は解かれ、同時に凄じい分量の爆竹が打ち鳴らされた。入村許可とあいなり、それから村長Sさんの家の楼上で大歓迎の酒宴。長老たちが紹介され、これから酒杯のやりとり、そしてまた歌の競演。全員、無理やり唱わされ、酒を飲まされる。ここでもE氏のひとり舞台。今回の調査の成功は一にかれの功績に負うているといわなければならない。民族学調査でひとつの村に停留するのは、わたしにとって今回がはじめてのことで、村民の生活、気心が知られ

ると同時に、その反面の辛さも経験したし、研究対象としても収穫はおかった。ただ、民族学者には語学の才能に加えて、心臓はもとより、強靱な内臓とか料理の技術が必要らしいということはなんとなく承知していたけれども、歌唱パフォーマンスの力量まで求められるとは。当分ショックで立ち直れそうにない。

サン・メダル教会の コンサート

阪 上 孝

冬のバリの楽しみの一つはコンサートである。コンサート・ホールにでかけるのもよいが、手軽に演奏を楽しむという点では、教会で毎週夕刻から開かれる小さなコンサートだろう。それは新人の音楽家たちが室内楽を数曲演奏するという簡単なもので、服装や時間を気にせず気軽にでかけられるのがよい。

ムフタール通りの南端にあるサン・メダル教会のコンサートには、宿から近いせいもあって、毎回かよった。この教会は、一七二〇年代に、痙攣派とよばれる狂信的なジャンセニストがこのままで集団的な鞭打ち苦行をく

りひろげたことで知られているが、教会建築や所蔵品のうえではとりたてていうほどのものはない。けれども、丸天井と石の壁に反響するフルートやチェロの音色、天井に近いステンドグラスからさしこむ冬の夕暮のほのかな光は、まったく不信心な私をも多少は瞑想的にさせるのに十分だった。土曜日の夕刻にはこのコンサートにだけ、ムフタール通りで夕食をとるのが私の日課だったが、二〇〇ほどある席は近くからやってくる聴衆でいつも満席で、音楽が人々に親しみ深いものになっている様子がかがわれた。

このコンサートで何度かつづけて隣り合わせた老婦人があった。ショパンのピアノ・ソナタが演奏されたとき、彼女はこの曲は父のとても好きだった曲だと話しかけてきた。きけば、彼女は、音楽教師だった父親につられて子どものころにポーランドのクラコウからバりにやってきたのだそうだ。その後ポーランドには二度帰ったただけだが、今もクラコウには親戚がおり、ポーランドは自分の祖国だという。そして春になれば「連帯」のもとで自由を回復したポーランドに行きたいと希望をこめて語った。こんなところにも東欧の「革命」が及んでいる。そうなければいいですね、といって別れたが、その後、彼女を見かけなくなった。

ふりかえってみると、この一年間の変化は何という変

化だろう。あの孤独で小柄な老婦人は東欧「革命」からバルト三国の弾圧にいたるこの激変をどんな思いで見ているだろう。

欧米における中国関係資料

新保 敦子

私は在外研究で、一九八九年三月から一九九〇年三月まで、アメリカに約十一カ月、イギリスに約一月滞在する機会を得た。その際の報告を、欧米における中国関係資料の紹介を中心に行っていきたい。まずアメリカでは、スタンフォード大学人類学科に在籍した。人類学のゼミを四科目受講したほか、フーバー研究所東アジア図書館で、主に中国の民国時期の資料を閲覧・収集する作業を行った。

東アジア研究図書館の蔵書は、中国関係については、特に近・現代関係資料が多く、民国時期のものに見るべきものが豊富である。内容面では政府公報関係が充実しており、『江蘇政府公報』といった、地方省レベルでの公報も充実している。地方関係資料が多いことは、フーバー蔵書の特色と言えよう。また民国時期に地方で発行



バージニア大学にて

された雑誌、たとえば『月刊河北』といったものや、地方新聞も多数収蔵している。また地方省・市レベルの統計も多い。その蔵書には、「東方研究所蔵」の印が押されたものが、少なくなかった。

フーバーの外には、ハーバード・エンチン、コロンビア、プリンストン、エール、UCバークレー、バージニア等各大学の東アジア関係図書館を訪問した。

アメリカにおける中国資料コレクションについて、言及する際に忘れてはならないのは、データ・ベースの充実であろう。アメリカには、RLINとOCLCという図書館をつなぐ二大データ・ベースのシステムがある。

RLINはスタンフォード大学が中心となって開発したものであるが、ハーバードを除く主要大学図書館と議会図書館が加入している。OCLCは公共図書館と大学ではハーバードが加入している。

RLINとOCLCは、ともに中・日・韓のデータ・ベース(CJK)を持っている。CJKによって、これらの各大学の東アジア研究図書館が収蔵している関係資料の検索が可能である。つまり西海岸のスタンフォードに居ながら、東海岸のコロンビア大学が収蔵する東アジア関係の蔵書を調べ、その上で相互貸借によって借り出すことが可能となるのである。

イギリスではロンドン大学 SOAS、ケンブリッジ、

オックスフォード、エジンバラの各大学において、中国関係の蔵書を閲覧した。アメリカに比べれば、蔵書量は少なかった。ただ研究者は大変に親切な人が多く、彼らとの議論には、大いに啓発されるところがあった。



書いたもの一覧 一九九〇年一月—一九九〇年十二月(五十音順) ●は単行本

・相川 佳予子

マス・シテイの風景—「ファッション」 産経新聞夕刊 六月

●近畿の産業博物館(共著)

阿吽社 一一月

日本古代の服飾／中国の服飾／朝鮮半島の服飾

「家政学事典」 朝倉書店 一一月

・飛鳥井 雅道

西郷隆盛は平和主義者だったか「日本近代史の

虚像と実像」第一巻

大月書店 一月

国家と芸能、新派新劇「日本芸能史」第七巻

法政大学出版会 三月

「小説」とはなにか

人文学報 66号 三月

天皇・公家的なものと武家的なもの

創造の世界 七四号 小学館 五月

プロレタリア文化運動他三五項目「新編日本史辞典」

東京創元社 六月

人と人との関係・つながり「日本史伝記総覧」

新人物往来社 九月

「機密要言」そして「宮女之事」文芸別冊

河出書房 一〇月

明治天皇と近世文化「甦る明治の巨匠たち」

産経新聞社 一一月

第五議会における天皇の影—呪縛の構造と進行状況—

・荒井 健

李義山詩集再考—明清諸本覚え書—

人文学報 67号 十二月

「囲城」周辺(その二)—「邦江三百吟」治家格言—

東方学報 京都六二冊 三月

ほんやくは恐ろしい

颯風 二四号 七月

・新井 晋司

暦法の発達と政治過程—漢代を中心に—

中国語 一一月

・石川 禎浩

中国賭博行

颯風 二三号 一月

中ソ国境警備隊の人々

しにか 九月

書評・中村哲夫著「移情閣遺聞」

孫文研究 一一号 五月

・稲葉 稔

セルジューク朝と後期ガズナ朝—その国境地帯について—

東方学報 京都六二冊 三月

書評・Deryl N. Maclean, *Religion and Society in Arab Sind*

西南アジア研究 三三二号 三月

・井上 進

方志の位置 「山根幸夫教授退休記念明代史論叢」

蔵書と読書

汲古書院 三月
東方学報 京都六二冊 三月

「北溪字義」版本考

東方学 八〇輯 七月

・宇佐美 齊

落日に憑かれて

東京新聞ほか 三月七日

放浪のにしひがし—山頭火とランボー—

鳩よ! 三月

作家の恋文

京都新聞 四月一二日

解説・デュラス著「ヒロシマ私の恋文」ちくま文庫

筑摩書房 五月

書評・上村くにこ著「白鳥のシンボリズム」週刊読書人 六月

夏を送る 三田文学(秋季号) 九月

書評・清岡卓行著「薔薇ぐるい」図書新聞 一二月

・梅原 郁

宋代の戸口問題をめぐって 東方学報 京都六二冊 三月

宋代都市の房僦とその周辺「布目論叢 東アジアの法と社会」

汲古書院 五月

旧中国の都市

しにか 七月

東洋学の系譜・加藤繁 しにか 九月

・奥村 弘

播磨にみる地方民会の特徴—飾磨県臨時県会同を中心に—

神戸大学史学年報 5号 三月

兵庫県における改進黨系政治運動の展開過程—兵神交詢支社を

中心に— 新修神戸市史紀要 20号 三月

「満州国」街村制に関する基礎的考察 人文学報 66号 三月

論評・山中永之佑「近代日本の地方制度と〈名望家支配〉」

法制史研究 34号 三月

・勝村 哲也

芸文類聚の条文構成と六朝目録との関連性について

東方学報 京都六二冊 三月

・桑山 正進

●カーピシー・ガンダーラ史研究

京都大学人文科学研究所 三月

Parisにおける南アジア考古学国際学会第一〇回集会

通信(日仏東洋学会) 一一号 三月

ナレンドラヤシャスと破仏

日本オリエント学会創立三十五周年記念オリエント学論集

刀水書房 七月

●瞑想するアジア(驚異の世界史)(共著)

・河野 道房

中国絵画の空間表現—大観の山水画の虚と実と—

「芸術の理論と歴史」 思文閣出版 三月

中国の鑑賞論—絵画論を中心に— 美学 一六〇 三月

王詠について—二画風併存の問題—

東方学報 京都六二冊 三月

・小南 一郎

「李娃伝」をめぐって

罪と罰(岩波講座 東洋思想13・中国宗教思想1) 東方学報 京都六二冊 三月

岩波書店 四月

・阪上 孝

革命と伝統 思想 七八九号 三月

バリの日記から

創造的市民（京都市社会教育総合センター）二五号 一〇月

モンテスキューとフランス革命 札幌日仏協会会報 一二月

・佐々木 克

草莽の志士城多董と岩倉具視 日本歴史 五〇〇号 一月

明治維新期の天皇と華族 思想 七八九号 三月

東京「遷都」の政治過程 人文学報 66号 四月

国民統合とシンボル 北方風土 二〇号 四月

大久保利通との「出会い」 明治維新史学会報 一六号

解説・津本陽「春風無刀流」 中公文庫 中央公論社 五月

「見えない天皇」から「見せる天皇」へ 思想 七九四号 八月

・新保 敦子

現代中国的教育体制改革 「中日現代化二十一世紀展望」

長野県松川町の健康学習／一九六〇年代の社会教育実践 中国社会科学出版社 六月

「叢書生涯教育」第2巻 雄松堂 十月

・曾布川 寛

中国美術における聖と清 「芸術の理論と歴史」

竹林七賢図―特に南朝陵墓出土の磚画について 思文閣出版 三月

国際交流美術史研究会第八回シンポジウム「説話美術」 三月

響堂山石窟考 東方学報 京都六二冊 三月

・高田 時雄

Notations de prononciation à l'aide de la méthode zhuyin 直音

à Dunhuang. Documents et Archives provenant de l'Asie Centrale (Actes du Colloque Franco-japonais, Kyoto, 4-8 octobre 1989).

拆字考 江口一久編「ことは遊びの民族誌」大修館書店 三月

ウイグル字音史大概 東方学報 京都六二冊 三月

九一十世紀河西漢語方言考 中国敦煌吐魯番学会研究通讯 総第十七期 六月

五姓説在敦煌藏族 「敦煌吐魯番学研究論文集」

敦煌の単語帳 上海漢語大詞典出版社 六月

紹介・鈴木孝夫「日本語と外国語」 月刊言語 六月

●S・R・ラムゼイ「中国の諸言語―歴史と現在」(共訳) 月刊言語 七月

今、漢字を考える 大修館書店 一一月

・田中 淡 聖教新聞 一二月四日

中国造園史における初期的風格と江南庭園遺構 東方学報 京都六二冊 三月

中国の高床住居―その源流と展開―(特集「中国貴州の高床

住居と集落―黔东南のトン族とその周辺) 住宅建築 四月

鼓楼と風雨橋(同右) 同右

市場の風景(同右) 同右

中国壁画墓中的建築図及唐初期的建築様式(冬籬・程国慶訳)

中華古建築(創刊号) 中国科学技術出版社 六月

The Technology of Fortification in Mozi, Abstracts of Papers,
6th International Conference on the History of Science in China,
Cambridge 八月

都市の中の理想郷—明・清時代の庭園(朝日百科・世界の歴史
95) 朝日新聞社 九月

・田中雅一

シヴァ神に帰依した王たち—インド、タンジャヴール美術館と
タミル大学博物館— 月刊みんぱく 二月
ある野生ゾウの死—デリーのインド国立鉄道交通博物館—

表紙写真の説明・インドの影絵人形 月刊みんぱく 十一月
司祭と霊媒—スリランカ・タミル漁村における村落祭祀の分業
関係をめぐって—

国立民族学博物館研究報告 一五巻二号 十二月

・谷泰

家僕としての家畜 「世界史の問い2 生活の技術・生産の技
術」 岩波書店 二月

・塚本明

近世後期の都市の住民構造と都市政策

日本史研究 三三一号 三月
家持／借屋人／借屋請人／町用人・町代(キーワード) 高橋

康夫・吉田伸之編「日本都市史入門」Ⅲ

東京大学出版会 三月

・辻正博

雲崗第六洞神像／龍門蓮華洞仏光背／房山四大部経成就碑記
拓本解説 「中国石刻拓本展出品図録」

京都大学文学部博物館 四月

・磯波護

宮崎市定「中国政治論集」(中公文庫) 解説 中央公論社 一月
官僚受難の時代(朝日百科・世界の歴史61) 朝日新聞社 一月
神都洛陽の四面関 金田章裕編「アジアにおける都市の形態と
構造に関する歴史地理学的研究」 京都大学文学部 三月
唐代社会における金銀 東方学報 京都六二冊 三月

●中国石刻拓本展出品図録 解説監修 京大文学部博物館 四月
曹操が官渡の戦いで袁紹に勝利したのはなぜ?(三国志の謎)
歴史読本ワールド 一卷二号 新人物往来社 七月

歴史写真のトリック(ハラの虫) 読売新聞夕刊 九月二二日
京都大学所蔵の唐墓誌 唐代史研究会報告第Ⅶ集「東アジア古
文書の史的研究」 刀水書房 九月

平岡武夫「現代日本朝日人物事典」 朝日新聞社 十二月

●The Shaolin Monastery Stele on Mount Song, Italian School of
East Asian Studies in Kyoto 十二月

・富永茂樹

●P・デュムシエル/J・P・デュビュイ 「物の地獄—ルネ・
ジラールと経済の論理」(共訳) 法政大学出版局 二月
知識と社会秩序—フランス革命期の一技術将校の肖像 「講
座・転換期における人間」第七巻 岩波書店 三月

家庭における環境教育（正田正博他二名と共同執筆）「文化教育としての環境教育の総合的研究」 環境教育研究会 六月
群集という名の無人地帯

革命の変容—総裁政府期の教育と社会（朝日百科・世界の歴史 97）
制度と生命 ソシオロジ 第一〇九号
朝日新聞社 九月

ある暦の運命 社会学研究会 一〇月
淡交 二月
若者意識調査の解釈「京都への提言Ⅱ—京都と若者」
C・D・I 二月

・富谷 至
漢代辺境の関所—玉門関の所在をめぐって
東洋史研究 四八—四 三月

性の刑罰—宮刑 「性のポリフォニー」 世界思想社 一〇月
・狭間 直樹
関于「三大政策」的幾点考察 「孫中山与他的時代—孫中山研究国際學術討論會文集」 中華書局 一九八九年一〇月
五四運動的精神背景 「五四運動与中国文化建設—五四運動七
十周年學術討論會論文選」

中国社会科学出版社 一九八九年一〇月
孫文と韓国独立運動 青丘 4 五月
宋教仁に見る伝統と近代—「日記」を中心に
東方学報 京都六二冊 三月

ある小さな発見—「希查標柱」について

中国—文化と社会— 5 六月
章炳麟と明治の「アジア主義」（松本健一氏との対談） 知識 八月

近現代中国人物別称データベース BESHOU

・藤井 譲治
京都大学大型計算機センター広報 23巻6号 一二月

・小浜市史 藩政史料編三（共編） 小浜市 二月
中世から近世へ 「けいはんな風土記」 同朋舎出版 三月
大名城郭普請許可制について 人文学報 66号 三月

●江戸幕府老中制形成過程の研究 校倉書房 六月
●福井県史 資料編9（共編） 福井県 七月
將軍上洛 京都民報 一二月

●北野天満宮和書漢籍目録（共編） 北野天満宮 一二月
・藤田 隆則
「ノリ」の構造 サンケイ新聞 九月十九日

The composition of a drama in musical units: *Hagoromo* with the *Wagonnai* variation. Paper presented at the special event of the 4th Symposium of the International Musicological Society, Osaka, July 23, 1990. 七月

・船山 徹
ダルマキールテイの「本質」論—*hazara* と *scabharra* 南都仏教 六三号 一九八九年一二月

部分と全体—インド仏教知識論における概要と後期の問題点

東方學報 京都六二冊 三月

・古屋 哲夫

近代日本における徴兵制度の形成過程 人文學報 66号 三月

・前川 和也

古代シュメール農業の技術と生産力 「世界史への問い」 生活の技術・生産の技術 岩波書店 二月

古代シュメールの社会 吉川守編 「NHK大英博物館1」 メソポタミア・文明の誕生 日本放送出版協会 一〇月

Cultivation methods in the Ur III period, in: *Irrigation and Agriculture in Mesopotamia Part 2* (Bulletin on Sumerian Agriculture 5), Cambridge Univ. Press, 1990.

三浦 秀一 東方學報 京都六二冊 三月

彭紹升と戴震の思想圈 平凡社 六月

光 永雅明 東方學報 京都六二冊 三月

●ダウニング街日記・上（共訳） 平凡社 六月

・麥谷 邦夫 東方學報 京都六二冊 三月

唐・玄宗御注「道德真經」および疏撰述をめぐる二、三の問題 東方學報 京都六二冊 三月

始と終／古と今／長と短／大と小（岩波講座 東洋思想13・中国宗教思想1） 岩波書店 四月

唐玄宗「道德真經」注疏中の「妙本」 世界宗教研究 一九九〇年二期 六月

書評・砂山稔著「隋唐道教思想史研究」 東方宗教 76 十一月

・森 時彦

第二次広東軍政府時期的孫中山 「孫中山与他的時代—孫中山研究国際學術討論會文集」 中華書局 一九八九年一〇月

論民族工業「黄金時期」和国内市場的形形成 「五四運動与中国文化建設—五四運動七十年學術討論會論文選」

中国社会科学出版社 一九八九年一〇月

「一九二三年恐慌」と中国紡績業の再編 東方學報 京都六二冊 三月

・山下 正男 普遍的觀點からみた象徴天皇制 人文學報 66号 三月

羊イメージ群とキリスト教 「羊の物語」 新宿書房 一二月

・山本 有造 産業化の時代 下 「日本經濟史」5（西川俊作と共編） 岩波書店 二月

貿易（奥和義と共筆） 同右書所収 人文學報 66号 三月

關東州貿易統計論 書評・浅田喬二「日本植民地研究史論」 アジア經濟 三一巻一二号 一二月

・山室 信一 書評・小山常実「天皇機關説と國民教育」 日本史研究 三三三二号 四月

明治議會制への道 ジュリスト 九五五号 五月

●言論とメディア（共編・校注・解説） 岩波書店 五月

・横山俊夫

Frederic Marshall as an Employee of the Japanese Legation
in Paris, in Edward R. Beauchamp & Akira Irie, eds.,

Foreign Employees in Nineteenth-Century Japan

(Boulder, San Francisco & London: Westview Press) 一月
社会史の行方(川北稔・川島昭夫両氏と鼎談)

JUSTITIA 創刊号 ミネルヴァ書房 三月

外国人及び外国企業活動促進のための調査報告書(主査・編集
参加) 財団法人関西産業活性化センター 三月

マス・シティの風景―「ガイジン」産経新聞夕刊 五月一〇日
研究開発機関の誘致条件整備に関する調査研究報告書(討論参
加) 財団法人関西産業活性化センター 三月

日用百科型節用集の使用態様の計量化分析法について

人文学報 66号 三月

平成の構図―新しい社会システムはあるか(第3回富士会議報

感銘を受けた本

・稲葉 稜

エド・レジス「アインシュタインの部屋」(工作舎)

告・討論参加)

日本アイ・ビー・エム 八月

梅棹文明学私見 「梅棹忠夫著作集 七」月報

中央公論社 八月

文の復権―情報時代の日本・京都「情報の時代」(89比叡会
議報告) 日本アイ・ビー・エム 一〇月

・吉川 忠 夫

本と末／独善と兼済／真人と聖人(岩波講座 東洋思想14・中
国宗教思想2) 岩波書店 一月

王遠知伝 東方学報 京都六二冊 三月

王羲之と山水(季刊「墨」スペシャル・王羲之)

芸術新聞社 四月

内と外(岩波講座 東洋思想13・中国宗教思想1)

岩波書店 四月

「中外日報」社説 二七回

一月一二月

・新保敦子

大平 健「豊かさの精神病理」(岩波新書)

人

文

第三七号

一九九一年三月三〇日

京都大学人文科学研究所蔵

口
寸
門
刊
本
三
三